

聖寿寺館跡に残る 中世アイヌ文化の痕跡

布施 和洋

(南部町教育委員会社会教育課
史跡対策室総括主査)

室町・戦国期の三戸南部氏

(さんのへなんぶし)の中心居館であった聖寿寺館跡(しょうじゅうじたてあと)からは、高級陶磁器や犬形土製品(いぬがたどせいひん)、真鍮生産埴塙(しんちゅうせいさいさんるつぼ)



聖寿寺館跡出土アイヌ文化関連遺物
(小川忠博さん撮影)

など、中央との密接な関係が伺われる遺物が確認される。

その一方で、現在の北海道など、北方地域とのつながりが垣間見えるアイヌ文化関連遺物も出土している。

写真はアイヌ文化特有の短弓(たんきゅう)の部品である中柄(ななかえ)や骨鏃(こつぞく)、骨針、刺突具で、鹿角(ろつかく)や動物骨を加工して作られている。端部に耳かき

がついた刺突具は、アイヌ文化の担い手が、和人制作の銅製の耳かきを骨角製で模倣したものと考えられる。

タマサイ(首飾り)の部品としてよく用いられるガラス玉は2点出土しており、両方とも直径4ミリ程度の非常に小ぶりなものである。

アイヌ文化では銭貨がイヤリングや首飾りの部品として利用されていたが、聖寿寺館跡からも意図的に端部に穴がつけられた銭貨が見つかっている。

これ以外にも、十字の刻

印(シロシ)が付いた中国産陶磁器皿、マキリの根付と考えられる中央に孔が開けられたクマの犬歯等が出土している。

北海道南部では、15〜16世紀にアイヌ文化集団と和人が混住していたことが考古学的な調査で明らかとなっている。

蝦夷地の大名となった松前氏の祖・武田信廣(たけだのぶひろ)が、15世紀後半に築いたとされる勝山館跡(かつやまだてあと・北海道上ノ国町)からは、アイヌ文化特有の骨角製品やガラス玉とともに、シロシが施された陶磁器が出土している。勝山館に隣接する夷王山墳墓群(いおうざんぶんぼぐん)からは、多数の和人墓に交じってアイヌ墓も確認されている。

聖寿寺館跡で出土した骨角製品をはじめとするアイヌ文化関連遺物の種類は、勝山館跡と同様のセットを構成している。制作途中の未成品や切断痕のある鹿角など道具素材も見つかっていることから、アイヌ文化の担い手が道具制作の作業を聖寿寺館内部で行っていたものと推測できる。

聖寿寺館跡では、アイヌ文化の多種多様な道具が城館内の広範囲にわたる複数の遺構で出土している。聖寿寺館内部でアイヌ文化の担い手が何らかの役割を担い、長期滞在の上、和人と混住していた可能性が高いと考えられる。

これらのアイヌ文化関連遺物は、南部氏による津軽侵攻を契機として、それまで十三湊安藤氏(とさみなとあんどうし)が担ってきた蝦夷地との交易関係を、部分的に三戸南部氏が引き継ぐ形で流入してきたものと考えられる。

聖寿寺館跡のアイヌ文化関連遺物は、主殿(しゅでん)や会所(かいしよ)に相当すると考えられる大型掘立柱建物群がある城館中心部でも出土している。アイヌ文化の担い手が居館中心域にも出入りできたと考えられることもできる。

このようなアイヌ文化特有の多種多様な製品は、南部氏一族の中でも聖寿寺館跡のみで確認されている。三戸南部氏は、アイヌ文化の担い手を自らの支配体制の中にゆるやかに取り込んでいたことが推測されよう。